2013(平成25)年
4月1日発行
Vol.54

ELCO RADAR

Ecological Life and Culture Organization

公益社団法人 環境生活文化機構 季刊 エルコレーダー

CONTENTS

TOP 広中和歌子会長・竹馬隼一郎理事長対談 …… 1

役員就任挨拶(代表理事)…… 6
役員就任挨拶(理事)…… 8
役員就任挨拶(監事)…… 9
公益法人移行後の運営と事業について… 10
環境を見つめる人々 37 …… 13
環境と経済・社会 25 …… 14
エコ&ユニフォーム最前線 5…… 15
事務局だより…… 16

広中和歌子会長・竹馬隼一郎理事長対談

公益社団法人としての新たな出発

公益社団法人移行と機構設立の背景

竹馬：本機構は昨年６月に内閣府公益認定等委員会から認定移行の答申を受け、今年４月１日に公益社団法人へ移行しました。

その目的を改めて申し上げますと、環境の保全に配慮した繊維製品の再生利用等に関する諸事業の実施を通じて、廃棄物の適正処理、また資源を有効利用し、天然資源の消費を抑え、環境への負担をできる限り軽減する生活文化の創造を図ろうとするものです。

今回、新しい体制に移行するにあたり代表理事４名、理事２名、監事３名、計９名の役員体制となりました。会長を今までどおり広中会長にお願いし、理事長を私が務めさせていただくことになりました。

広中：会長として今後さらに精一杯務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

竹馬：理事長としましても心新たにいい意味での緊張感をもって務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

改めまして本機構の歴史を振り返ってみますと、平成４年にブラジルで国際連合会議があり、リオデジャネイロ宣言がありました。これに安研社長の虫明清一初代理事長が強く触発され、これからの世の中、企業の社会的な責任として何か環境保護のために役に立ちたいと一念発起したことをきっかけに、東レ、兼松、チクマの四社が共鳴し、社団法人の設立を目指しました。

当時、使用済みユニフォームは捨てたり焼却したりしていました。そこでゴミにしない、燃やしてＣＯ$_2$を発生させない仕組みを作るために、ユニフォームを対象にリサイクルシステム構築を目指したのです。

広中：民間ではまだ珍しい時代でしたね。

竹馬：設立までに４年を要しまして、平成８年２月にスタートしました。広中会長にはそのときから会長職をお願いし、このように温かい光を照射し続けていただき、不動の会長でいらしてくださいます。

広中：もったいないお言葉です。私の場合は1986年に政治に入りましたが、どちらかというと、地球規模での環境問題にずっと取り組んできました。そういう一環で、お声がかかり会長に就任させていただきました。

私は戦後留学し長く海外に住んでおりましたので日本の公害体験についてはあまり実感がないのですが、日本が戦後どんどん経済発展する中で、「環境問題」というと当時は公害問題を意味していたわけですね。しかし、そのような問題を克服し、もっと地球規模で考える必要に迫られるようになりました。

いわゆるＣＯ$_2$排出による温暖化の問題です。それがリオの国際会議で大きく発信されたんですね。それまでは環境問題というと企業が出すゴミ問題や汚染物質による公害などが問題とされ、一般市民が被害を受けるイメージがありましたが、一般市民も自分たちも当事者である、生活そのものが地球を悪化させているという意識を持つよう

なＰＲがなされ始めましたね。

そして地球規模で考え、自分の足元で行動することが訴えられました。そこで自分に何ができるかといったときにリデュース・リユース・リサイクルという流れが考えられるようになったのですね。

竹馬：そうですね。我々が広中会長をリーダーにスタートしたときも趣旨は一緒でした。なんとか自分達でやれることからやっていこうという思いでした。

広中：捨ててしまうほうが簡単です。リサイクルするのは実に大変です。それなりの意識が高くないとできないことですからね。

竹馬：しかし、資源は有限ですから、ときには苦労をしても有効に使うよう今後ますます取り組んでいかなければなりません。

広中：特に日本は資源が乏しい国なので原料を輸入し、製品にして海外に輸出してきました。とはいえ作っただけであとは野となれ山となれでは無責任なわけで、最終的に再資源化することはとても意味のあることだと思います。

製品の製造段階からリサイクルを考える

竹馬：今やみんなでやっていかなくてはならない時代になったのでしょうね。

広中：ユニフォームでも洋服でもそうですが、もともと非常に手間ひまをかけて美しいものに、あるいは頑丈なものに、安心なものに作っておきながら、用途が終わったところで、ゴミになって燃やされたり埋められてしまうのはあまりにももったいないわけです。そこでリサイクルのシステムを使うわけですが、本機構のユニフォームリサイクルでは自動車の内装材になったりしますね。

竹馬：はい、そうです。建築用防水材などにも使います。我々はまだまだ環境意識が根付いていない時代にあえてリサイクルの事業を立ち上げましたので、当初は回収率が低かったのですが、現在は着実に実績をのばしています。事業としてはこの17年間で少しずつ認知度が高くなっています。いろいろな企業がリサイクルに対して関心を持ち始めたのだと思いますが、やはり社団法人という形で行ってきたからこそだと思います。環境省に認められ、大手のユーザーさんもこのシステムを使い始めてくださっています。そこで、この5，6年でぐんと大きくなってきました。

広中：私は1993年から94年にかけて環境庁長官を務めたときに驚いたのは、行政のかなりの部分が過去を背負っていたことでした。つまり水俣病やイタイイタイ病などの問題をいまだに抱えているわけです。公害はいったん出してしまうとあとあとの対処が大変です。最初から公害が出ないように取り組んでいくほうが、結局は効率的だと思います。

リサイクルの面でも同様で、最初からリサイクルを考えて製造過程を考えるほうが結局は全体としてうまく回りますね。ゴミやリサイクルというと産業のメインストリームからはずれたところにあるみたいですが、おもしろいし、クリエイティブだと思いますよ。

竹馬：ひとつの資源になり得るわけです。そのためには会長のおっしゃるように、商品を作る前の設計段階からリサイクルを意識することが大切ですね。例えば当機構では、東レのナイロン6といって世界で初めてケミカルリサイクルが可能になった素材を核にして、ユニフォームのリサイクルシステムの構築を目指していったのです。

これはナイロン製品がまたナイロンの原料に戻り、半永久的にリサイクルする画期的な素材になっているんですね。

広中：まさにそれが理想的なリサイクルのありかたですね。もとは石油ですから、半永久的に使えれば原料の輸入は少なくてすみますね。

竹馬：はい。元に戻すまでには電気も燃料も使いますが、元から作ったものに比べますと、大きくエネルギーを節約することができます。とはいえ今の問題はデフレというか、価格破壊競争が蔓延し外国で極力安く作り、日本にもってきて大量に販売する。一円でも安く作って、一円でも安く売ることを考えていることです。こうなるとリサイクルどころではなくなります。日本人特有の最後

までものを大切にするという考えをもう一度見直さなくてはなりません。

広中：明治、大正時代、そして戦後まではゴミは庭に埋めれば土に還るという考え方でした。ゴミがたくさん出る暮らしは、ある意味で豊かなのでしょうが、たくさんの無駄を出しました。そういう時代が60年代、70年代と続いてきたと思います。今、新しい形でゴミを出さない暮らしが求められていますね。

竹馬：しかし、現実的に家庭ゴミの集積所にはゴミが山盛りです。こんなことを続けていたら資源がなくなってしまいます。

公益社団法人としての役割と責任

竹馬：本機構は17年の歴史がありますが、社会的な認知度はまだ低く、力不足で所帯も小さい。しかし今後、内閣府の所管法人として「公益社団法人」の裏づけをもつことにより、リサイクルマーク事業をはじめその他の本機構活動においてさらに普及促進していくことができると思いますし、せっかく認定を受けたのですから、より広くより多くの方に参加していただくような再スタートをしたいですね。

公益社団法人環境生活文化機構　代表理事（会長）
前参議院議員　元環境庁長官　広中 和歌子

広中：認定を得るために多くの手続きとエネルギーを使われたと思います。せっかく認定を受けたからには、今度はどのように活動にプラスにしていくかということですね。経営的に、あるいは運営上、認知度や信頼性が高まるのであれば非常によいことだと思います。要は今後、何をしていくかだと思います。

竹馬：確かに認定を受けることで、いろいろな制約も生じます。特に事務手続きも増えるのでどうしようかという懸念もありましたが、やはり、今後の展開を考えていく上で、どうしても公益認定は必要という結論にいたりました。我々が理事会で話し合ったのは「信頼」についてです。「信用を目に見える形で」という意味で公益社団法人の道を選んだわけです。法的な認定を受けている公益社団法人だからこそ、もっと多くの会員やユーザーを増やし、もっと多くの方々に本機構について知っていただけるのではないかと期待しています。

広中：ユーザーからのご意見についてはいかがですか？

竹馬：ユーザーからもさまざまなご意見をいただいており、自分達のユニフォームをリサイクルした再生品を自分達で身近に使いたいというご要望がとても増えています。

広中：それは嬉しいですね。マテリアルリサイクルですね。私たちの世代ではかつて衣服を買うのが大変で、買えば非常に嬉しかったものです。今でも新しい服を着たときの喜びを覚えていますが、愛着をもって毎日着ていた衣服を捨てることなんてなかなかできません。

　ですから、それがまた再び生き返り人の役に立つというのは素晴らしいことです。もっとそういう活動のＰＲもできて、公益社団法人認定がプラスになって広がるといいですね。具体的には「あなたの使い古したものが役に立っている」ということがいろいろな機会に知らされる。そんな動きを期待しています。

環境・生活・文化の面でリーダーシップを

広中：具体的なビジョンについてどのようにお考えですか？

竹馬：リサイクル事業の中でもうひとつ考えているのは、環境は究極、個人個人のしつけだということです。これは私の同窓同期で大学教授をしている哲学者がおり、今世界各地で地球環境保護活動をしている友人の話ですが、環境問題とは結局、一人一人のしつけに行き着くということです。

例えば食事のときに「いただきます」「ごちそうさま」と感謝の言葉をいいますね。それがこのごろ、小学校の給食の参観日に親から異議が出ることがあるそうです。子どもにいただきますといわせていますが、給食費を払っているのに何故いわせるのかというのだそうです。

広中：そんな親御さんがいらっしゃるのですか？信じられない。

竹馬：いただきますとは自然の恵みに対する感謝、農作物を作る生産者や食事を作っている方々への感謝です。こういうあたりまえのことを取り違えている父兄が実際に出現しているのです。我々は、公益社団法人として、社会に対し、道徳的な啓蒙活動をしていくことも大切だと思います。

食事に出てきたものは全部食べる。食べられない以上は作らない。使ったテーブルはきちんと戻し、ゴミを出さないというようにする。すべて「あたりまえ」のことですが、再度、お伝えしていくことが大切だと思っています。

広中：一時が万事といいますが、本当に身の周りの感謝から思い起こしていくことが必要ですね。私達の子どもの時代にはものがなかった。ですから豊かさに対して「ありがたい」という気持ちは自然に感じますが、今やこれだけものが豊富にあふれていて、お金で何でも処理できる時代になってきたときに、今の子ども達は、どういう大人になっていくかということが問われてきますね。

竹馬：まずは今の子どもを育てている親を育てた大人や社会があったのでしょうし、今、育っている子ども達がどのように育つか心配でもあり、再度、人間としての道徳的な部分を見直していく必要があると思います。そのような部分も含めて、公益社団法人という冠をもったことで、自分達を律しながら少しずつ啓蒙していきたいと思います。

広中：そうですね。一度、その大切な部分を改めて思い出し、発言し、社会に何らかの影響を与えられると嬉しいですね。

竹馬：さらに環境に対しては、いろいろなデータや新聞記事を見ていると絶望的ですが、だからといって諦めてはならないと思います。

広中：自分達がやっていることの意味づけをし、発信していくことが大切ですね。

竹馬：今の時代、インターネットでいくらでも発信できますから、より多くの人に、より広く、本機構の活動を知っていただき、参加していただきたいと思います。広中会長にも様々な機会で世界に発信していただき、あわせて会員の皆様のお力添えをぜひともお願いしていかねばなりません。

広中：そうなれば、この機構の名前のとおり、「環境・生活・文化」が示す各分野で行動を起こす契機となることができますね。戦後の物質文明からもう少ししっとりとした心豊かな文化の創造を目指していければ嬉しいですね。

公益社団法人環境生活文化機構　代表理事（理事長）
株式会社チクマ　代表取締役社長　竹馬 隼一郎